

「コンピュータ・ネットワークの普及が企業に与える影響についての一考察」

93304 今野 克義

本論文では、近年目覚ましい発展を遂げているインターネットの「ネットワーク」としての役割について分析を行なっている。これまで、インターネットに関しての分析はその商用利用に関してのものが多く、その本質的な「ネットワーク」としての議論は少なかった。そこで、本論文では技術体系をも含めた形でインターネットの「ネットワーク」としての議論を社会科学的な視野を取り入れて進めた。

特に日本社会の典型的な組織構造としての「ツリー型(樹木)組織から、「リゾーム(根茎)組織へと至る変容をコンピュータ・ネットワークを主体として論じている。このような組織概念の根本的な変化が、企業を始めとした社会全体にどのような影響を与えるのかについて言及を試みた。

さて、本論文は4つの章からなっている。

第1章では「パソコンの発展および普及の系譜」として、今日ブーム的な出来事となっているパソコンの普及について歴史的・技術的背景を論じている。パソコンの普及が企業を始め一般消費者へのパソコン浸透を意味し、コンピュータ・ネットワーク発展の好材料となることが明らかになる。

第2章は「パソコンと企業」としている。企業内に浸透して行くパソコンがコンピュータ・ネットワークを介して、インターネットの開発と普及、マルチメディアの開発と普及、グローバル化・ボーダレス化という側面から変化して行く諸相を概観する。この章によって前章でのパソコン普及と、ネットワーク普及の接点を見出す。また、ネットワー

ク技術の標準化・平準化についての概説もここで行なう。尚、章の終わりにインターネットの歴史概説として、インターネットの歴史と今後の技術的問題などについても実例を踏まえて言及している。さらに、次章への流れとして、BBS方式のネットワークとパケット方式のネットワークについての考察もここで行なう。

第3章では「現象面」として、これまでのパソコン普及、ネットワーク普及の議論を合わせて、組織内でどのような変化が起きるのかについて考察を行なっている。また、企業情報システムについての歴史的流れを考慮しながら、特にイントラネットの普及についても考察を行なっている。本章では「外へ外へ」というインターネットの流れが「内へ内へ」というイントラネットの流れに変化する際に生じる現象面についての考察が中心となる。とりわけ、ここでは社会システムとしての「説得・誘導型社会システム」の概念と「リゾーム(根茎)組織」という社会概念について、コンピュータ・ネットワークを念頭に置いた考察が行なわれる。

第4章ではそれまでの議論を総括する。コンピュータ・ネットワークの普及が組織に与える影響について、公文俊平氏、中村雄二郎氏らの議論を踏まえて「リゾーム(根茎)」型組織についての考察を行なっている。その上で、イヴァン・イリイチ氏の「共生(Conviviality)」という言葉を用いて新しい組織形態の概念を一般化する試みを行なう。このように本論文では、コンピュータ・ネットワークの普及が社会の組織という部分にどのような影響を与えるのかについての考察を試みている。より広い視野で本論文を概観するならば、「ハード重視からソフト重視」への大きな流れが露呈される、ということが出来よう。

本論文ではこのように、コンピュータ・ネットワークの普及についての一般化を試みたが、少なからず問題が指摘されよう。そうした問題点を今後の研究課題にして、更なる研究を進めて行きたい。